

浪商 戦後初の全国高校野球大会優勝



島田雄三さん（85）写真左。昭和5（1930）年 大阪江戸堀生まれ。浪華商業学校野球部では4番ショート。卒業後は早稲田大学野球部、社会人チームで選手兼監督等を務めた。宝塚市在住

山本英夫さん（85）昭和5（1930）年 大阪心斎橋生まれ。浪華商業学校5年生から野球部マネージャーに。卒業後は住友倉庫に勤務。川西市在住

大正15（1926）年から昭和38（1963）年まで東淀川区淡路にあった野球の名門、浪華商業学校（現在：大阪体育大学浪商中学校・高等学校）。昭和21（1946）年夏、戦後初の全国中等学校優勝野球大会（夏の高校野球大会）にて優勝の栄光に輝いた。当時の野球部員だった島田さんと野球部マネージャーだった山本さんにお話をうかがった。

島田：当時大阪では、野球といえば浪商、京阪商業学校、日新商業学校、市岡中学校、興國商業学校が有名校。私は野球が好きで浪商に入学しました。入部したとき部員は40名ほど。1年生（昭和16年）のころは戦争も激しくなくて、まだ野球が十分楽しめる雰囲気やったね。

山本：というのもね、行軍といって行進の練習をさせられるんやけど、野球部は練習することが鍛えることになるので、行軍が免除されていたんです。

学徒動員と大阪大空襲

戦況が厳しくなり、2年生（昭和17年）の後半に文部省から学校へ野球中止の通達があった。浪商の学生は学徒動員として、クラスごとに4カ所の軍需工場へ勤務することになった。

島田：私のクラスは桜島の日立造船。当時はお国のためにと一生懸命でしたが、もう野球ができないんだとさみしい気持ちはありました。工場の行員さんには野球が好きなのもいたから、道具を持って行ってキャッチボールくらいは楽しんだかな。ほかの工場でもそうだったでしょ？

山本：うん。僕は尼崎の油谷重工業で、運動場になる砂場があったので行員さんと野球してたな。

島田：当時は毎日のように空襲があつて、工場への行き返りに焼夷弾を受けた人を見るのが辛かった。焼夷弾は六角形で、落ちるときにザーっと音がしてね。

山本：爆弾でなくてほとんどが焼夷弾やったね。空襲がきたら電車が止まるので、尼崎から歩いて帰るのが嫌で。防空壕をぱっと見たら死体が転がっててね。昭和20年3月13日の大阪大空襲の日は、自分の住んでいた心齋橋は焼夷弾の直撃は無かったんですが、よそへ落ちた火がまわってきて家が焼け出されたので、新橋のほうへ逃げました。

島田：あの日はみんな川沿いを走り逃げてましたよ。幸い、家族は田舎へ疎開してましたし、同級生にもこの空襲で亡くなった人はいなかったんじゃないかな。近所の人には亡くなられた人もいたと聞いています。

島田：当時はお国のためにみんな一所懸命でした。私は4年生（15歳）になったとき兵隊に志願して、大津の飛行予科練の後、陸軍少年飛行兵学校へ行きました。しかし、8月1日に入校して8月15日には終戦を迎えました。

山本：15日間の兵隊さんやな。僕は終戦の日は学徒動員の工場がお休みで、友人と宝塚植物園にいました。公園の中で放送が聴こえて、ああ、やっとおさまったのかな、終わったんやなという気持ちでした。

島田：私は兵学校にいて、教官は「米軍を竹やりで打ってやる！」と言う人もいて、自分もそうすべきかなと思いましたが……。まあホッとした面もありましたね。日々を生きるために明け暮れたという状況でしたから。

野球部の再開と戦後初の全国大会

淡路にあった浪商の校舎は焼失。戦後は東淡路小学校の校舎を間借りして授業が再開した。野球部は4年生（昭和20年）の後半ごろに再開。同級生や後輩はみ

⑪島田雄三さん・山本英夫さん

んな疎開先から戻ってきて、部員は30名ほどだった。都島の高倉にあった鐘紡のグラウンドを借りて練習をしたり、プロ野球で活躍する先輩が練習道具を持ってきてくれるなど、浪商OBの協力が大きかったそう。二人が5年生になった昭和21（1946）年、夏の大会が再開する。

山本：僕はちょっと変わってましてね、野球部に入ったのは5年生になってから。家も学校も焼け、ヤミ市の間を通学しているような環境で不良になつたらいけないと思って。野球が好きやから入れてくれってお願いしました。

島田：監督のタケダ先生が白羽の矢を立てたんです。名マネージャーでしたよ。

山本：野球キチガイとはいえ、名門浪商に5年生から入れてくれなんてよく言ったものです。当時うちには平古場という伝説のピッチャーがいて、負け知らずでした。

島田：1試合につき平均10以上もの三振を取ってたな。

山本：ドロップ（カーブ）が得意な速球派。ギッチョ（サウスポー）なのでみんな打ちにくくて、当たっても取りにくい球ばかり。そうするとショートの上野君が後ろで守る。肩が強かったから。

島田：勢いのない打球が多かったな。

山本：春ごろから京都や神戸の学校と交流試合をはじめて、6月から7月中は大阪予選。予選決勝戦の相手は日新商業でした。

島田：相手も強かったので緊張した。よほどフンドシ締めていかんと全国大会に行けないぞと思いました。

山本：3対2でやっと勝って全国大会へ。大阪府下54校の代表です。当時は甲子園球場が進駐軍に接収されていたので、西宮球場で開催されました。浪商は淡路や茨木など地元の学生が多かったから、盛り上げてくれたな。

島田：お客さんも終戦後で娯楽に飢えてたんでしょう、連日超満員で。客席が白いシャツで真っ白になっていたのを覚えています。また野球ができることがとにかくうれしくて、対戦相手の学校とも、「お前らもここまで勝ち進んできたんやな、よかったな、一生懸命やろうで」と声をかけあって。みなニコニコしてましたよ。やるほうも見るほうも球場が一体になって。

山本：日本人は野球が好きだしね、戦後復興の象徴という感じでした。負けた連中が帰るときに、（滞在合宿用の）米を勝ち進んだチームに渡してくれました。食糧難の時代、厳しい監視の目をくぐり抜けて持ってきていた米でした。

山本：第一試合の和歌山中（和歌山県立桐蔭中学校・高等学校）が強かった。優勝候補だったので負けるかと思いましたが、なんと11対2で勝ちました。1回にツーダン（ツーアウト）から3番のキャッチャーの広瀬がレフトオーバー

⑪島田雄三さん・山本英夫さん

一のランニングホームラン。4番の島田くんがライト線へ三塁打を打って、平古場がレフト線へ二塁打。僕はスコアを付けてたので鮮明に覚えてます。

島田：第二試合が函館中（北海道函館中部高等学校）、第三試合が東京高等師範付属中（筑波大学附属中学校・高等学校）。決勝戦が京都二中（京都府立鳥羽高等学校）、これは投手戦で3対0で勝ったんだっか？

山本：2対0やで。

島田：そうそう、ホームインしましたよ。決勝戦は帽子の上に「必勝」と書いたハチマキをしてね。

山本：決勝戦だけはフリーバッティングをさせてくれるんですが、なんとプロになっていた浪商OBの今西投手が投げてくれたんです。当時は厳しいプロアマ規定がなかったから。

山本：優勝した後が面白い。お祝いに、阪急電車が電車を貸切にして、西宮球場から箕面の合宿所まで送ってくれたんです。当時は西宮球場あたりが立体交差してたんですが今津線の今津よりの線路脇に仮設で板張りのホームを作って、電車を着けてくれて。びっくりしました。石橋駅で折り返すときには、駅員総出で迎えてくれて。でも、今から10年前に先輩と二人で改めて当時のお礼に行ったのですが、阪急電車にはその記録が残っていないそうです。

島田：トラックに乗って優勝旗を持って大阪市役所へ挨拶に行ったことも覚えています。

山本：進駐軍に優勝旗を赤旗に間違われたね。

卒業後の進路

島田さんは浪商卒業後、早稲田大学へ進学。当時は六大学野球が盛んで、浪商の同級生、平古場投手が慶応大学、キャッチャーの広瀬が法政大学へ進学し、対戦相手となる。早稲田卒業後はプロ野球・大映スターズで6年間セカンドで活躍。引退後は北海道羽幌町の羽幌炭鉱のチームに監督兼選手として指導者になり、都市対抗戦まで連れていった。「幸せな野球人生でした」と語る。

山本さんは浪商卒業後、住友倉庫へ就職。島田さんらの活躍する早慶戦は3日間応援に出向き、試合のスコアを付けていたという。島田さんいわく「最高のマネージャー」。今でも決勝戦を戦った京都二中の選手とは交流があり、高校野球のOB会へは浪商代表として出席している。

誕生日が一日違いという二人は今でも仲がよく、年に数回は会っているそうだ。

若い世代へ伝えたいこと

山本：できたら、忍耐、辛抱を持つことかな。戦争は、自分の力ではどうしようもできないという出来事だったから、当時の人は忍耐強かった。

島田：今は恵まれているということに感謝し、母校や郷土のために、一生懸命がんばってほしい。

=====

戦後初の野球大会優勝のエピソードについては、5分程度の映像資料がある。(浪商高校OB会)